2024 年 8 月 4 日
宮崎中部教会平和聖日
牧師　乾元美

イザヤ書 9：1〜6
エフェソの信徒への手紙 2：14〜22
「平和の福音」

【招詞】詩編 34：6〜9
【讃美歌】２４「たたえよ、主の民」
【詩編交読】詩編６編
【赦しの宣言】イザヤ書 55：7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」
【讃美歌】２０５「今日は光が」
【祈祷】
【聖書】イザヤ書 9：1〜6、エフェソの信徒への手紙 2：14〜22
【説教】「平和の福音」
＜平和を祈って＞
　８月の一週目は、毎年「平和聖日」として礼拝をささげます。８月は、第二次世界大戦における、6 日の広島への原爆投下、また 9 日の長崎への原爆投下、そして 15 日の終戦を覚える月だからです。
　また今現在、わたしたちは、数年に渡るロシアのウクライナ侵攻のこと。そして、まさに聖書に語られている地である、ガザ地区とイスラエルの戦争のことを覚えます。その他にも、紛争や、内戦が絶えない地域が、数多くあります。
　平和の祭典が世界規模で盛り上がっている中で、今日この日も、傷つけられ、悲しみ、怒り、怯えている人々がいる。その現実を、わたしたちはどのように受け止めているでしょうか。平和を、どのように考えたらよいのでしょうか。争いはなぜ止められないのでしょうか。
　今日、わたしたちは、御言葉に導きを求めつつ、心から平和を求める祈りを、一つにしていきたいと願います。

＜敵意、隔ての壁＞
　さて、今日読まれた「エフェソの信徒への手紙」の 2：14 には、「敵意という隔ての壁」という言葉が出てきました。
　「敵意という隔ての壁」。わたしたちは、相手に敵意を抱くと、相手との間を隔てる、壁を作ります。相手をこちらに侵入させないように。自分自身を守るために。また、相手との関係を断ち切るために。
　国同士でも、それはよく見られます。かつてのドイツのベルリンの壁。移民を侵入させないために、アメリカの国境に造られた壁。ガザ地区に造られた隔離壁。

また、わたしたちは、自分自身の中にも、敵意を持つ人に対しては、隔ての壁を作ります。心を開かない。殻に閉じこもる。関係を持たないようにする。
この「敵意という隔ての壁」こそ、人間同士の争いの元となるものです。

ちなみに、今日の聖書箇所における、「敵意という隔ての壁」という言葉は、エルサレム神殿にある、神の民と、異邦人とを隔てる壁が、意識されていると考えられます。
エルサレム神殿は、神の律法に基づいて割礼を受けた神の民が、神さまを礼拝するための場所です。この聖なる礼拝の場所には、神の律法を知らず、それゆえに神さまの教えを守れない罪人とされた異邦人は、外庭までしか、入ることが許されていませんでした。
この「隔ての壁」には、ギリシア語とラテン語で、「これより中に入る異邦人は死刑に処す」と書かれていたそうです。
神の民であるユダヤ人からすれば、律法を守って神さまとの正しい関係にある自分たちと、神さまの律法を守らない、汚れた罪人である異邦人は、区別されなければなりません。
ですから、異邦人は汚れた者として軽蔑し、関わらないようにし、遠ざけようとした。そして、それがまさに敵意となって、隔ての壁が築かれたのです。
しかし、自分たちこそ正しく清い、と信じていた神の民もまた、神の律法の根本の精神、「神さまを愛し、隣人を自分のように愛しなさい」という教えに、そのような形で背いてしまうことを、止めることができなかったのです。

…自分たちは正しい。自分たちは清い。自分たちは特別である。
わたしたちが、そのような思いを抱く時。同時にわたしたちは、自分の正しさを貫こうとし、他の人々を排除し、自分に与えられている特権を守ろうとするようになります。
わたしたちは、自分の正しさを曲げることは出来ません。だから、相手を無理やり曲げようとします。そこに、敵意と争いが起こります。そして、相手を従わせることができる強さを持つ者が、正しいとされてしまうのです。
また、わたしたちは、自分に特権であると気分がいいですし、自分が損をすること、相手が利益を受けることが許せません。ですから、まず、自分のことをとにかく守る。そして、他は見捨てたり、排除したり、見ないふりをして、冷たい壁を築くのです。

＜罪＞
…さて聖書は、このような「敵意」、「隔ての壁」の根っこには、わたしたちの、神さまに対する罪が横たわっているのだ、ということを見つめています。
まず、わたしたちは、神さまに対して、敵意を抱いているのです。神さまと争おうとしているのです。
わたしたちは、自分の人生を、自分の思い通りに歩みたいと願っています。自分を中心にして、自分の満足、自分の平和、自分の喜びを求めています。自分の心の思いに従って、進みたい方向に進んでいきたいと願っています。
それの何が悪いのか。そう思われるかも知れません。

でもこれは、自分が、自分自身の主人であろう、自分が、自分の人生の支配者であろう、としているということです。

わたしたち人間はすべて、神さまに造られ、神さまに命を与えられ、神さまに生かされているものです。ですから本来、わたしたちの人生の主人は、神さまであり。わたしたちの命を支配しておられるのは、神さまなのです。
そして神さまは、力でねじ伏せて支配するようなお方ではなく、愛と慈しみと恵みによって、支配してくださるお方です。神さまは、わたしたち一人一人の存在を、心から深く、わたしたちの想像も及ばないほどに、大切に思い、愛して下さっているからです。
その神さまが、わたしたちに求めておられる生き方は、わたしたちが「神さまを愛すること」。また、神さまがお造りになり、愛しておられるすべての者が、互いに愛し合って共に生きること。つまり、「隣人を自分のように愛すること」です。
この神さまの御心に従って、神さまを愛して生きること。隣人を愛して生きること。本当はそれが、神さまに造られた人間の、あるべき自然な姿なのです。

しかし、わたしたちは、自分を主人にして、神さまを主人とせず。自分の思いに従って、神さまの思いに逆らって、歩んでいます。それを聖書は、「罪」と呼ぶのです。
「罪」とは、「的外れ」という言葉です。神さまに造られたわたしたちは、神さまの方を向いて、神さまに向かって歩むべき者なのに。神さまという的を外して、自己中心に、自分の方を向いたり、好きな方へ向いたり、時には目を閉じてしまったりしている。
そうやってわたしたちは、的を外し、道を踏み外し、それぞれあらぬ方向へ進んでしまっているのです。
もし、わたしたち一人一人が、同じお一人の神さまを見つめて、同じ神さまの方を向いて歩んでいくなら、お互いにぶつかり合うことはないはずです。同じ方向を向いて、同じ目的地を目指して、助け合って、励まし合って、重荷を担い合って、共に歩んでいくことが出来るのです。
でも、わたしたち一人一人が、神さまから逸れて、あちこち、自分勝手に歩んでいるから、わたしたちは、隣人と一緒に、歩んでいくことが出来ない。ぶつかったり、争ったり、競ったり。あるいは、無視をしたり、見捨てたり。自分のことしか見ないで、他の人をちゃんと見つめないで、隔ての壁をたくさん作りながら、歩んでいってしまうのです。
自分勝手に歩んで、神さまとの関係を壊してしまって、神さまとの交わり、神さまとの平和を失っている。
そんな、わたしたち一人一人の罪が、互いの間に争いを生んでいるのです。

＜キリストは平和＞
では、わたしたちはどうしたら、神さまとの平和を得ることが出来るのでしょうか。
敵対してしまった神さまと、どのようにして和解し、どのようにして交わりを回復していただくことができるのでしょうか。

…わたしたちに平和を与えてくださることがお出来になるのは、神の御子イエスさま、ただお一人です。
エフェソ 2：14 に「キリストはわたしたちの平和であります」とありました。
イエスさま御自身が、イエスさまそのものが、わたしたちの平和なのです。平和とは、イエスさまによって実現するものであり、わたしたちが平和を得るとは、わたしたちが、イエスさまを得る、ということ。イエスさまと共にある、ということなのです。

14～16 節にはこうありました。「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」
「二つのもの」とか、「双方」と語られているのは、「敵意という隔ての壁」を作って、こちらと、あちら、という風に、分断し、対立しているわたしたちのことです。
イエスさまは、そのようになっている「二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました」とあります。
「御自分の肉において」。これは十字架によって、イエスさまの体の肉が裂かれたことを現わしています。そのあとに、「十字架を通して」とか、「十字架によって敵意を滅ぼされました」とある通りです。
イエスさまは、ご自分の十字架の死によって、わたしたちを「神と和解させ」、敵意を滅ぼしてくださる。また、そのことが、二つに分かれているわたしたちを、一つにする。敵という隔ての壁を取り壊してくださる。
そうして、敵対していた双方を、一つの体としてくださる、というのです。

神の御子イエスさまは、まずわたしたちの、神さまに対する敵意を、わたしたちの罪のすべてを、御自分の十字架の死に、引き受けてくださいました。ご自分の肉を裂くことで、ご自分の血を流すことで、イエスさまは、わたしたち一人一人を、父なる神さまと和解させてくださったのです。
これは、神さまからの、一方的な恵みによる、和解です。
わたしたちは自分の罪を自分では何も償っていないし、背くことを完全に止めたわけでもありません。神さまに対する罪を償うことなどできないし、完全に神さまに従う正しい者となることなど出来ないのです。
それにも関わらず、イエスさまが、わたしたちのところに来てくださり、わたしたちの敵意を、わたしたちの罪を、すべて引き受け、ご自分の十字架の死によって滅ぼしてくださったのです。
イエスさまは、まず神さまとわたしたちとの間の「隔ての壁」を取り壊し、罪の赦しを宣言し、神さまとわたしたちの間に、平和を与えてくださいました。
そして、復活によって、わたしたちに、神さまと親しく交わり、神さまとの愛の関係に生きることが出来る、新しい命を与えてくださったのです。

「規則と戒律ずくめの律法を廃棄された」とありますが、これは、わたしたちの代わりにイエスさまが罪を贖ってくださり、ただ恵みによって救ってくださることによって。わたしたちが、自分の行いや、自分の正しさによって救いを得ようとすることを、無力化された、ということです。
わたしたちは、自分の善い行いや、自分の正しさによって、神さまと和解できるのではない。隔ての壁を取り壊せるのではない。平和を造り出せるのではない。
わたしたちはただ、イエスさまが与えくださる平和を、受け取るだけなのです。イエスさまが、わたしたちの平和なのです。

わたしたちが、イエスさまの十字架と復活による救いを信じて、イエスさまを受け入れるとき、わたしたちは洗礼を受け、イエスさまと一体とされます。
そうして、神の子と罪人が、一つとされるのです。わたしたちは、イエスさまと一体となって、神の子として、神さまと共に、生きるようになるのです。
それが、神さまと和解させていただき、神さまとの平和に与る、ということなのです。

＜二つのものを一つに＞
そして、わたしたちの平和であるイエスさまにあって、互いに敵対していたわたしたちもまた、敵意を滅ぼされ、隔ての壁を取り壊され、一つの体になることができるのです。
16 節には、「こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」とありました。

神さまの御前で、わたしたちは共に、神さまに背く罪人同士です。
また、神さまの御前で、わたしたちは共に、神の御子イエスさまが命を惜しまず捨てててでも救ってくださるほどに、神さまに愛されている者同士です。
このわたしたち一人一人が、イエスさまにあって、神さまの御前に罪を悔い改めるとき。また、神さまをまことの神とし、わたしの主人とし、わたしを愛し、支配してくださる方として受け入れるとき。
わたしたちは、同じお一人のイエスさまに結ばれ、そのゆえに、互いにもまた、一つに結ばれるのです。

そして、互いに敵対していたわたしたちは、神さまを礼拝する者として、共に神さまを主とあがめ、共に神さまに支配され、共に神さまを愛し、共に神さまの御心に生きる者として新しくされ、同じ方向を向き、共に歩んでいく者とされるのです。
ですから、17～18 節にはこうあります。「キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。」

これはまさに、教会のことだと言えるでしょう。イエスさまに平和の福音を告げ知らされた者は、キリストによって、一つの霊に結ばれて、一体とされて、御父の御前に出ることができるのです。そして、共に一つとなって、神さまを礼拝することが出来るのです。
ここに、まさに、まことの平和が実現しているのです。

ですから、気を付けるべきは。ここで語られているのは、わたしたちが、共にイエスさまに一つに結ばれ、神さまと和解させられて、そこから、隣人との間の敵意の壁を、無くしていけるようになる。一つになることを目指していける。平和を築こうとしていける。ということではありません。
イエスさまと一つに結ばれ、神さまと和解させられたなら。そこには、神さまとの平和と共に、隣人との間の平和も、同時に実現している、と言われているのです。敵意という隔ての壁は、もはや取り除かれている、と言われているのです。
わたしたちは、イエスさまと結ばれた時点で、すでに、イエスさまの十字架に、わたしたちの罪も、敵意も、隔ての壁も、すべてを磔にされ、滅ぼされたからです。
そして、わたしたちは、共にお一人のイエスさまに結ばれて、すでに、もう一つの体に、なっているのです。イエスさまの平和の中に、わたしたちはすでに置かれているのです。
これが、イエスさまの救いを信じ、受け入れたわたしたちに、神さまが与えてくださった現実であり。すでに、そうなっているという、事実なのです。

＜平和を見つめて＞
…では、わたしたちは、まだイエスさまと結ばれていない人、教会に来ていない人とは、どうなるのでしょうか。
神さまの愛を知らず、神さまと未だ和解せず、神さまに敵対して歩む人々は、わたしたちに向かって、敵意を持ち、隔ての壁を築こうとしてくるかも知れません。
一方で、わたしたちの敵意は、もうすでにイエスさまに滅ぼされた、と言われています。
ですからそのとき、わたしたちは、まだ神さまとの和解に与っていない人たちの敵意をも受け止めて、愛し、赦し、祈ることが求められているのです。
平和そのものであられるイエスさまと一つになって生きる者として、わたしたちもまた、イエスさまのように、平和を実現する者とされているのです。

それは、厳しく、苦しく、忍耐のいることです。敵意を向けられるとき、わたしたちの内にもまた、再び敵意が芽生えようとするかも知れません。
でも、その時には、わたしたちと一体となってくださったイエスさまが、「その敵意は、すべてわたしが引き取った。あなたの敵意も、そして相手の敵意も、すべてわたしの十字架で滅ぼした。だから、あなたがたは、わたしの愛に根ざし、わたしの愛にしっかり立ちなさい」。そう言ってくださるのです。
敵意を滅ぼしてくださる方が共にいてくださるから、わたしたちもまた、敵意に敵意を返すことなく、共に生きる道を祈り求めていけるのです。

ですから、わたしたちは、わたしたちの平和であるイエスさまの御力を、全面的に信頼し、心からより頼み、助けを祈り求めなければなりません。
わたしと、今、敵対している相手とを、イエスさまが、ご自分の十字架を通して、神さまと和解させ、一つにしてくださることを、信じるしかありません。
イエスさまの御力によるしか、わたしたちが平和を得る道はないからです。

でもまさに、そのようにして、一人一人が、イエスさまと共に生き、神さまと、隣人と、まことの平和に生きるようになっていくことが、互いに愛し合い、赦し合い、一つになって生きる世界を実現していくのです。
世界の戦争や、争いを前に、無力を感じるわたしたちです。でも、それは、遠い国の出来事で、どうしようもないことではありません。ここから、わたしたちは、始められます。
わたしたちは今与えられているこの場所で、わたしたちの平和であるイエスさまにあずかって、真剣に、神さまを愛し、隣人を愛し、平和を実現する歩みを、生き始めていくことが出来るのです。
そして、自分がそのように新しく生きる者とされたように。すべての者が、わたしたちの平和であるイエスさまの福音を知り、神さまに愛されていることを知り、神さまに罪を赦されていることを知り。イエスさまにあって一つとなって、まことの平和に生きる世界となることを、心から祈り求めていきたいのです。

【お祈り】天の父なる神さま
世界の戦争や、争いに、わたしたちは心を痛めます。今、苦しみ、悲しみ、困難の只中にある人々、特に、小さい者、弱い者、嘆き悲しんでいる者に、あなたの助けの御手を、すばやく述べてください。そして、戦争が一日も早く終わりますように。
しかし、そう祈りながら、わたしたちは自ら身近な隣人に敵意を抱き、争いを起こしていることを、心から悔い改めます。わたしたちの平和であられるイエスさまが、共にいてくださいますから、わたしたちの敵意を滅ぼし、隔ての壁を取り除き、あなたとの和解を得させてください。そして、イエスさまにあって、わたしたちを一つの体としてください。
また、その恵みの中で、わたしたちから、隣人を愛し、敵を赦し、祈っていくことが出来ますように。そして、イエスさまの平和の福音に、世のすべての人が与れますように。
わたしたちの平和である、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】４１６「神の民は」　【信仰告白】ニカイア信条
【聖餐】【讃美歌】７３「主よ、平和のうちに」
【十戒】【献金】６５－１「今そなえる」
【主の祈り】【祈祷】
【讃美歌】２９「天のみ民も」
【祝福】主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン